

注記：本論考は日本国際問題研究所の見解を代表するものではありません。

ロシアの対日歴史認識問題—情報戦の一手段として—

河西陽平

(中曽根平和研究所研究員)

2024年5月7日、オンラインにて、河西陽平・中曽根平和研究所研究員を報告者に招いて、第1回東アジア史研究会が開催された。

本報告は、ロシアの対日歴史認識がいかなるもので、それがどのように変容してきたのかを検討するものである。まず、ロシアにおける歴史研究では、日本の「対ソ侵略性」を強調する立場が主流であることが指摘された。日本の歴史学界では「田中上奏文」は偽書であることが定説となっているのに対し、ロシアの歴史学界では「田中上奏文」が実在することが前提とされている。ロシアでは張作霖爆殺事件から「関東軍特種演習（関特演）」に至る一連の出来事が壮大な大陸侵略計画の実体化である、という「虚構の歴史」が公式の歴史観となっていることが論じられた。

続いて、1941年の「関特演」に関するロシアの歴史研究における解釈が検討された。ロシアでは「関特演」はドイツと連携した日本が、独ソ戦を契機に本格的な対ソ戦争準備に乗り出したものであると解釈されている。本報告ではこの解釈は以下の二点において誤りであることが論じられた。第一に、ドイツのヒトラー、リッペントロップ外相、および日本の三者間には対ソ戦への日本の関与について認識の相違があったにもかかわらず、ロシアの歴史研究はこの点を考慮しておらず、日独関係を過大評価している。第二に、独ソ開戦以降、第二次世界大戦の終結に至るまでの間、日独両国の統帥部が共同して対ソ攻撃のための行動を調整したことはない。また、日本の参謀本部には強硬な対ソ戦論者はほとんどおらず、「関特演」を一貫した対ソ戦準備とは見なせない。「関特演」には①「好機」に応じた対ソ武力行使、②劣勢にあった関東軍の対ソ戦備の増強、③南方進出時における後背の安全確保という複数の目的があり、独ソ戦況とともに目的が変化していったにもかかわらず、ロシアの歴史研究はこれらの事実を無視して、「関特演」をドイツと呼応した日本による対ソ戦準備であるという議論を展開している。

最後に、歴史問題が認知領域における戦いに利用される可能性が指摘された。ロシアの公式の歴史観においては、日本を降伏に導いたのは米国による原爆投下ではなくソ連の対日参戦であると説明され、原爆投下をもたらした災禍を強調することで、日米関係に楔を打ち込むことが試みられている。また、ロシアの国定歴史教科書では日本の対外政策の「侵略性」が強調されている。プーチン政権下においてロシアの歴史認識は愛国主義的な色彩を強め、ソ連・ロシアの対外行動を正当化するものとなっている。本報告では、ロシアにおいて史実とは異なる単純なナラティブが教育の場で繰り返し教えられ、ロシアの若年層の対日認識が硬化することは、長期的には日露関係にとって好ましくないとの見解が示された。

研究会参加者からは、他国の歴史認識との比較やロシアの歴史認識が他国に及ぼす影響など、グローバルな視点から多くの論点が提示され、活発な議論が展開された。

(作成：日本国際問題研究所 領土・歴史センター)